江別市野幌地区における高齢社会への意識とまちづくり活動

—活動の経緯と基礎的住民意識調査の報告—

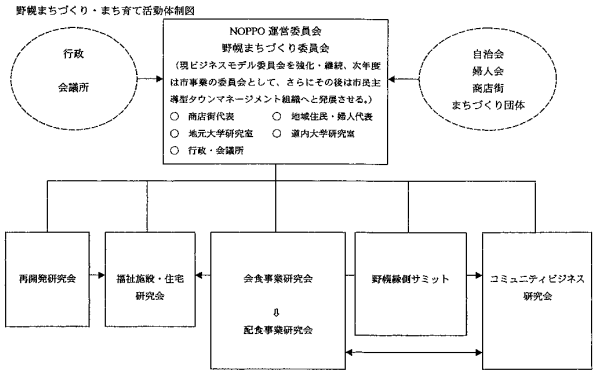
中澤　秀雄

筆者は2001年秋から江別市野幌地区におけるまちづくり活動に関わっている．野幌商店街振興組合を舞台とする，このまちづくり活動は，高齢者食事配達サービスへの展開を考えており，そのニーズ調査が必要となったため，2002年初頭に筆者を中心に基礎調査を行った．調査方法はさまざまな制限から独特のものを工夫せざるを得ず，調査項目も最低限のものであったが，幸いに多くの住民の協力を得ることができた．そこで，まちづくり活動の経過について簡単に紹介したのち，本調査の方法と結果を整理して報告することで，調査に協力して下さった方々への説明責任を果たしたい．

1．はじめに

筆者は縁あって2001年秋から江別市野幌地区におけるまちづくり活動に関わっている．具体的には「野幌まちづくり委員会」[1]の定例会等に委員の一人として参加し，まちづくりプランナー，道内大学の教員，地元商店街のメンバー，地区婦人協会代表などの他委員と議論を重ねている．この「野幌まちづくり委員会」は，野幌商店街振興組合を舞台に成立しているものだが，商店街に止まらず，野幌地区の将来を考える人々の緩やかな結合である．このまちづくり活動の統一的目標としては，「子供からお年寄りまで安全に・安心して暮らせるまちづくり」を掲げ，とりわけ現時点では人々の交流を深めることに重点が置かれている．手仕事などを媒介にした交流活動は，北海道新聞にも紹介された(2001/12/11)．

これは2001年夏頃から本格的活動がはじまったものであり，まちづくり講習会などを活発に開催するほか，具体的な活動としてミニ着物の縫製を通じて交流をはかる「野幌縁側サミット」，地域のお年寄りを集めた会食実験，高齢者用施設について情報収集し評価をWWW上で提供する「ミシュラン事業」，



出所：同委員会資料，2002/01/15

図1　野幌まちづくり委員会の体制図(案)

NAKAZAWA Hideo　札幌学院大学社会情報学部

などが行われつつある．

図1に見える配食事業（食事配達サービス事業）が，事業展開の核と考えられている活動である．東京世田谷の老人給食協力会「ふきのとう」（老人給食協力会ふきのとう，1989）の活動は，このように高齢社会を見据えた活動が地域づくりの核になることを証明した（清水，2000）．

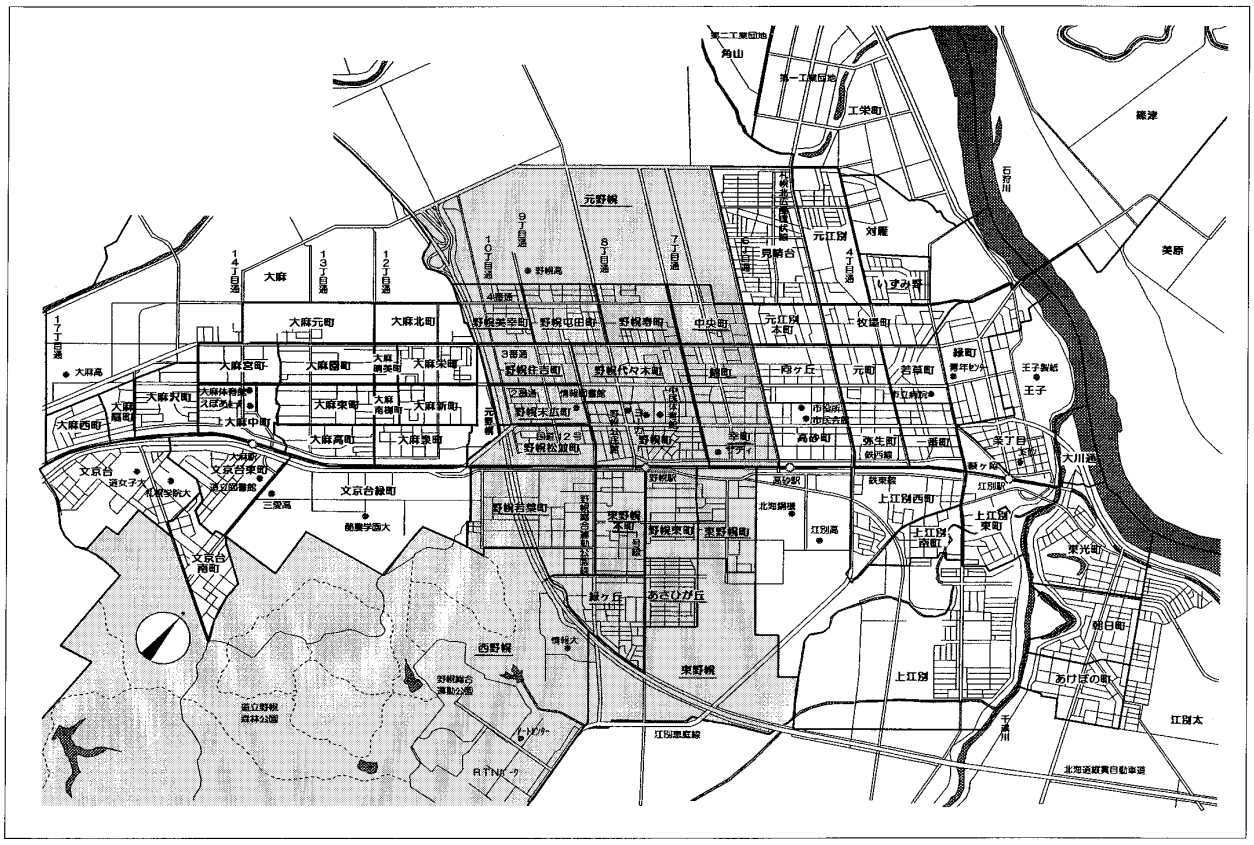
このような事業を実現していくための前提として，まちづくり活動の浸透度合いや地区の高齢化の実態及びニーズを把握する必要があると考えられる．本稿は，そのために行われた基礎調査の報告である．その方法と結果については3節以降で詳論するが，まずは背景知識を持たない読み手のために文脈を作っておきたい．すなわち，野幌地区の特性や都市計画上の位置づけを，2節で簡単に説明し，それらが調査を試みる状況としてどのような意味を持ったのかを説明しておきたい．

2．野幌地区の特性と都市計画

2.1　野幌地区の特性

江別市は札幌の東に隣接する，人口12万のベッドタウンである．市民には周知のように，当市は歴史的に東側から市街地が形成され，①JR江別駅・高砂駅を中心に拠点機能が集中する江別地区，②野幌駅を起点とし農地や森林を後背地とする野幌地区，③大麻駅周辺に大学が集中する大麻地区，の順に地域形成がなされてきた．江別地区は住工混在で，王子製紙江別工場や火力発電所，町村牧場などが石狩川沿いに立地しているが，商店街は衰退傾向にある．いっぽう大麻地区は最も札幌に近いとか学生が多いこともあって近郊住宅地としての特徴を持ち，道営大麻団地などを抱えている．近年では鉄道林保存運動で全国的に有名になるなど[2]，市民活動にも蓄積がある．

この2地区に挟まれた野幌地区は，明治4



注：図は『江別市統計書』より。下線を引いた町名が野幌地区。

図2　野幌地区の位置

年に宮城県等からの屯田兵が入植して碁盤の目状に区画が形成された．良質な陶土を産することから，大正・昭和期には煉瓦工場が多く立地し，ここで生産された煉瓦は，道庁や小樽倉庫街の建築に用いられたという[3]．

戦後は住宅地域に転換し，マンション建設も進んでいることから，昔日の面影を探すことは難しくなったが，人口は微増傾向が続いていたため，飲食店の多い商店街は，全国平均に比べれば空洞化の度合いが低いといえる．

2.2　江別市の都市計画と野幌地区

野幌地区に限らず江別市は，交通の要衝として，商工業の立地によって，さらには北海道としては温暖な気候を生かした稲作酪農などによって，恵まれた条件のもとにあったといえる．しかも高度成長期以降は，札幌市の住宅都市として人口の伸びが続いていた．江別市の都市基本計画や総合計画は，これら恵まれた条件の延長線上に組まれているように思われる．1985－1994 年を計画年次とする「新総合計画・前期基本計画」および 1995－2004 年を計画年次とする「新総合計画・後期基本計画」では人口 15 万人を目標としている．

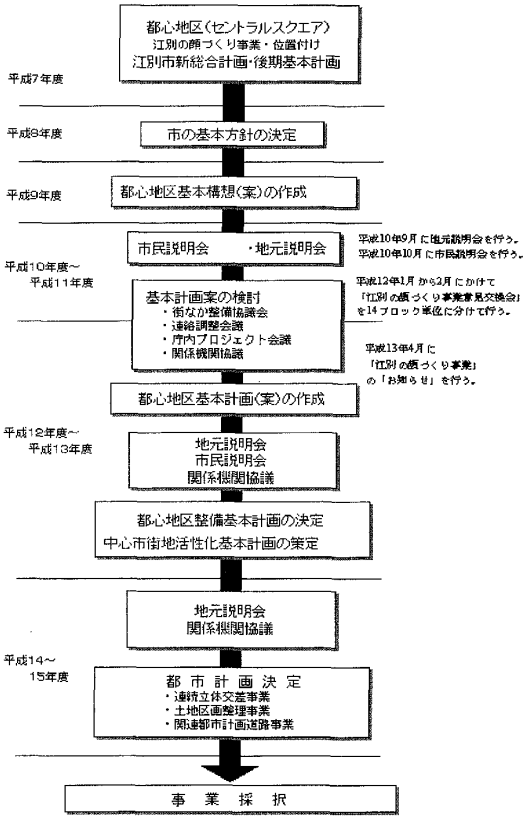
このうち後期基本計画の「市街地整備」の項目のなかで，「江別の顔づくり事業」が謳われている（図 4）．JR 特急の停車する野幌駅周辺を，江別市の「顔」として基盤整備しようというのである．「施策の柱」として①交流の場，生活文化機能の実現，②緑豊かな「市民のリビング空間」の形成，③都心居住の促進，④これらを結ぶ交通機能の強化，が挙げられている（江別市，1995）．

この施策を具体的なデザインとして描いた「野幌駅周辺まちづくり事業の都市地区基本構想（案）」は，平成 9 年度に作成され，翌 10－11 年度に地元説明会や住民参加による案の検討が行われた．この「基本構想案」では駅に直結した屋根付き多目的ガーデン，駅前の区画整理事業，商店街のギャラリーテラス化など大規模な再開発が盛り込まれている．この計画にたいして商店街振興組合や市民団体が提言を出しており[4]，これら議論を踏まえて，平成 13 年度までに「都心地区整備基本計画」及び「中心市街地活性化基本計画」が策定されることになっているが，平成 14 年 1 月現在決定に至っていない．バブル景気の余韻が残っていた頃に策定された計画であるが，社会情勢の変化とりわけ財政事情の悪化により，少なくとも当初の形での実現可能性が薄まっていると思われる．

すなわち，計画が思うような進捗を見せない中で，平成 10－12 年までの地元での議論を受け継ぐ，「野幌まちづくり委員会」が曲がりなりにも活動を続けている現状だといえようか．

2.3　調査にあたっての状況判断

以上のような文脈から，今回の調査にあ



出所：江別市建設部
(http://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/~kensetsu/index.htm)

図 3　「江別の顔づくり事業」経過

たっての仮説—というよりは一定の状況判断—が生まれてくる．第一に，まちづくり活動がどの程度浸透しているか不安がある．まちづくりという単語自体は知られていても飽きがきている可能性もある．第二に，住宅都市として高齢社会の問題や防犯の問題にどの程度意識を持っているか不明である．第三に，広大な野幌地区のなかで，町丁目ごとの属性や生活意識についての基礎データがないということである．すなわち，具体的な仮説を設定する以前に，基礎的な実態把握が必要な状態といえる[5]．

こうしたことから我々は，今回の調査を基礎的・予備的なものと位置づけ，小規模かつ被調査者の負担が少ない形で行うことにした．質問は最低限に抑えてA3サイズ裏表に収まるようにし，またプライバシーに立ち入る質問は削除した．一方，まちづくり活動についての広報という意味も含めて，挨拶状では詳しく活動内容を説明し，先述の新聞記事も添付した．野幌まちづくり委員会では，この調査について12月14日「ビジネスモデル研究会」で議論を持った．当初，質問文そのものを広報的にする案があったが，より学術的な調査の方が回収率も上がると提案した．調査の内容についても，食事についての不安やニーズを把握することを基本線として修正合意された．この議論を踏まえて筆者が調査票の設計を担当し，資料2に添付したような調査票が出来上がって，12月29日の小委員会で最終確認を行った．

以上のように事実確認的な調査ではあるが，設計にあたって筆者が想定した仮説は次のようなものである．①高齢者の食事サービスに対するニーズはかなり高く，配食サービスについても値段に止まらないものを求めているのではないか，②高齢者施設についても，町なかへの立地志向が強まっているのではないか，③我々のまちづくり活動の浸透度は，せいぜい駅北地区の一部の町に限られているのでないか．こうした仮説が支持されたかどうかは4節で概観し，3節では調査方法について説明しよう．

3．調査の方法

調査票は年明け早々に印刷し，1月10－11日にサンプリングを実施した．このサンプリングに基づき，12－13日の二日間でアルバイトも動員して1000戸への戸別投函を行い（郵送ではない），調査票を郵送で返却してもらうよう依頼状をつけた（資料1）．なお，インセンティブ（謝礼）は一切付けなかった．

我々の方法は郵送法に分類されると思われるが，①相手の宛名を特定せず，当該番地に当日居住している世帯の家事担当者に依頼していること，②投函の過程で場合によっては相手と直接接触していること，の2点は留置法に近い特徴を持っている．いっぽう，母集団の設定や抽出などの方法論はかなり複雑な

資料1：挨拶状

平成14年1月11日

野幌地区住民のみなさま

野幌まちづくり研究会　委員長　今尚之
（北海道教育大学旭川校　生活情報研究室　助教授）
野幌商店街振興組合　理事長　山田政信

アンケート調査のお願い

拝啓　時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

今冬は12月からの大雪で、皆様におかれましては大変苦労されていることと存じます。このたびは突然のお手紙で失礼いたしますが、この文書は、野幌地区の住宅地図から、くじ引きのような方法で抜き出した1000世帯にお送りしております。

さて、私ども野幌まちづくり研究会・野幌商店街振興組合では、裏面の北海道新聞記事にありますように、「まち育て」事業に取り組み始めています。これは江別市による「江別の顔づくり事業」とも連携しつつ、商店街だけではなく地元の団体、住民、学校の皆さんと交流を深めながら進めています。『野幌には住まう町としての魅力づくりがもっとも必要である』との認識のもとに、子供からお年寄りまで安全に・安心して暮らすことができる地域づくりを目指して、まちづくり講習会などを行っています。

このたび地域住民にとって望ましい事業展開を考えるために、みなさまの御意見をうかがいたく、このアンケート調査を実施することになりました。年初の御多忙な折、お手数をおかけいたしますが、御協力いただけましたら幸いに存じます。

末筆ながら、今年も皆様のますますのご多幸をお祈り申し上げます。

敬具

＊　調査は無記名で、回答票からあなたの個人情報を特定するてがかりはありません。できるだけ普段家事を担当されている方がご記入いただき、同封の封筒にて、1月25日までに御返送いただけましたら幸いに存じます。

＊　この調査は、札幌学院大学中澤研究室（社会学）と協力して行っています。中澤研究室では、この調査は社会的・学術的に意義深いもので、地元のニーズを引き出し、成果を地域に還元できるものと考えています。調査の内容など御不明な点がございましたら、下記に御連絡下さい。

〒069-8555　江別市文京台11番地　札幌学院大学
社会情報学部　助教授　中澤秀雄
電話　011-386-8111　内線5111
Email　nakazawa@sgu.ac.jp

資料２：調査票

2002年1月14日

■『野幌地区のまちづくり』についての調査■

野幌まちづくり研究会・野幌商店街振興組合・札幌学院大学中澤研究室

ご協力ありがとうございます。この調査は、できるだけ普段家事を担当されている方がお答えください。あてはまるところに○をつけ、（　　）がある場合には文章や数字をご記入下さい。

【問１】　あなたは野幌地区についてどのようなイメージを持っていますか。次のなかから、あてはまるものに　すべて　○をつけてください。

1　静かな街である$_{1}$	6　不用心になりつつある$_{6}$
2　人と人の交流が盛ん$_{2}$	7　人と人とのつながりが薄い$_{7}$
3　緑が多い$_{3}$	8　環境が悪い$_{8}$
4　安全な町である$_{4}$	9　その他$_{9}$（　　）
5　高齢化しつつある$_{5}$	

【問２】　あなたはふだん、野幌商店街（野幌駅北口）にどのくらいなじみがありますか。あてはまるものに ○ をつけ、（　）のなかに数字を記入してください。

1 通勤・通学の経路にしている（車・徒歩）$_{10}$	週（　　）日くらい$_{11\ 12}$
2 外出の経路になっている（車・徒歩）$_{13}$	週（　　）日くらい$_{14\ 15}$
3 商店街の店に立ち寄る（車・徒歩）$_{16}$	月（　　）回くらい$_{17\ 18}$
4 たまに通過する（車・徒歩）$_{19}$	月（　　）回くらい$_{20\ 21}$

＊「2ヶ月に一回」など半端な数字なら「月0.5回」のように、小数や分数でお答えください。

【付問】　野幌商店街の国道12号近くにある「ギャラリーNOPPO（ノッポ）」というまちづくり活動の拠点について、ご存じでしたか。$_{22}$

1　知っている	4　知らなかった
2　通りがかったことがある	5　その他（　　）
3　名前を聞いたことがある	

「ノッポ」では、地域の主婦や高齢者が集まる食事会を定期的に開催したり、食事配達サービスに取り組みたいと考えています。そこで、お年寄りの食事などに関するみなさまの考えについて伺います。

【問３】　あなたのご家族は、ふだん、どのように夕食をとっていますか。以下のあてはまるところに、おおよその数字をご記入ください。

	あなた自身	子供さん（離れて住んでいる場合も）	ご両親（離れて住んでいる場合も）
自宅で調理した食事をとる	週　回 $_{23\ 24}$	週　回 $_{25\ 26}$	週　回 $_{27\ 28}$
そうざい、テイクアウトなどを買って食べる	週　回 $_{29\ 30}$	週　回 $_{31\ 32}$	週　回 $_{33\ 34}$
レストランなどで外食する	週　回 $_{35\ 36}$	週　回 $_{37\ 38}$	週　回 $_{39\ 40}$
その他（　　）	週　回 $_{41\ 42}$	週　回 $_{43\ 44}$	週　回 $_{45\ 46}$

＊「月に一回」など半端な数字なら「週 1/4 回」「週0.25回」のように、小数や分数でお答えください。

【問４】　いま差し迫った問題かどうかは別にして、身近にいるお年寄りのことを考えたとき、食事について次のような心配はあるでしょうか。あてはまるところに　○　をつけて下さい。

（１）他人と食事する機会が少なくなるという心配$_{47}$

1	ある	2	多少ある	3	ほとんどない	4	ない

（２）外出が難しくて、満足な食材をそろえられないという心配$_{48}$

1	ある	2	多少ある	3	ほとんどない	4	ない

（３）火を使うことなど、料理するときの危険が大きくなるという心配$_{49}$

1	ある	2	多少ある	3	ほとんどない	4	ない

（４）高齢者に適した食事配達サービスが不足しているという心配$_{50}$

1	**ある**	**2**	**多少ある**	3	ほとんどない	4	ない

【付問】　(4)で1, 2を選んだ方に伺います。どのような食事配達サービスがあればよいと思いますか。上位３つまで、数字を記入してください。

1　値段が安い	5　配達のときに人間的なやりとりがある
2　必要なときいつでも配達してくれる	6　好きなものを心おきなく食べられる
3　毎食バリエーションのあるものを配達してくれる	7　一人では料理できないものを食べられる
4　一人一人の好みにあった気配りをしてくれる	8　その他（　　）

もっとも必要	（　　）番$_{51}$	次に必要	（　　）番$_{52}$
三番目に必要	（　　）番$_{53}$		

【問５】　いますぐに必要かどうかは別にして、お年寄りの介護を考えたとき、次のような施設が身近に欲しいと思いますか。あてはまるもの　すべてに　○　をつけてください。

1　静かな郊外にある老人ホーム$_{54}$	5　静かな郊外にある老人病院$_{58}$
2　町なかにある老人ホーム$_{55}$	6　町なかにある老人病院$_{59}$
3　静かな郊外にある短期入所施設（デイケア・ショートステイ）$_{56}$	7　静かな郊外にある介護センター$_{60}$
4　町なかにある短期入所施設$_{57}$	8　町なかにある介護センター$_{61}$
	9　その他（　　）$_{62}$

最後に、あなた自身のことで、分析に必要な最低限のことをお聞きします。個人情報を特定するようなてかがりは一切ありませんので、ご協力をお願いします。

F1　回答した方の年齢・性別をお答えください。	満（　　）歳（男・女）$_{63\ 64\ 65}$
F2　あなたのお住まいの町はどちらですか。	（　　）$_{66\ 67}$
F3　野幌には通算して何年間お住まいですか。	（　　）年 $_{68\ 69}$
F4　同居しているご家族は、ご自分を含め何人ですか。	（　　）人 $_{70}$

F5　現在、どのような住居にお住まいですか。 $_{71}$

1　持ち家（一戸建て）	5　社宅・寮
2　持ち家（マンション）	6　その他（　　）
3　賃貸アパート・マンション	
4　公営住宅	

F6　あなたのご両親または祖父母などで、65歳以上の方はいらっしゃいますか。いらっしゃる場合には、どのように暮らしていますか。あてはまるもの　すべてに　○をつけて下さい。

1　65歳以上の者はいない$_{72}$	5　一人で暮らしている$_{76}$
2　この家で二世帯同居している$_{73}$	6　老人ホームなど施設に入っている$_{77}$
3　別の家で二世帯同居している$_{74}$	7　病院に入院している$_{78}$
4　老夫婦で暮らしている$_{75}$	8　その他（　　）$_{79}$

ご協力ありがとうございました。集計結果は、まちづくり広報誌などで随時お伝えするほか、「ギャラリーNoppo」にも掲示しますので、お気軽にお越しください。その他、野幌のまちづくり等に関してご意見があれば、余白にご自由にお書き下さい。

ので，3.1 節から 3.3 節に分けて詳論する．

3.1　母集団と抽出台帳

当初，われわれはこの調査を，選挙人名簿を台帳として行うつもりで，江別市選挙管理委員会に申請書を提出した．ところが，担当課の回答は「選挙に関係しない調査に名簿を閲覧させることはできない」というものだった．この回答が内規によるのか裁量によるのか定かではないが，少なくとも筆者は札幌市でこのような回答に出会ったことはない．住

民基本台帳の閲覧にも1件500円の費用がかかることから，われわれは行政の持つ名簿利用を諦めざるを得なかった．町内会等の持つ名簿を貸していただく方法もあるが，時間的制約や未加入世帯の意識も知りたいこと等から見送り，今回はあくまでも基礎調査という位置づけで，住宅地図を台帳とすることにした．

したがって調査対象単位は世帯ということになる．調査票への回答は「主として家事を担当している方」にお願いした（二世帯以上同居の場合，若夫婦のほうを優先した）．さらに実際の居住を最優先する立場から，住んでいる世帯が代わっていても，現世帯に投函することとした．空家ならば，サンプルから除外して再サンプリングを行う．この結果，選挙人名簿等を台帳として行う通常の調査と比較して，より現状に近い母集団が設定できたことになるのではないか．まずは「調査当日に空家でない野幌地区の全住宅」を母集団としたといえる．この中から1000世帯を抜き出すサンプリングの方法を，以下説明する．

3.2 サンプルの割当（quota）

選挙人名簿等と比べて，統一基準で整理された度合いの低い台帳を使う以上，サンプルの割当は出来るだけ厳密にして，バイアスを減らしていかねばならない．そこで，野幌地区の付置状況にあわせた比例配分ができるよう，2段階で割当を工夫した．

最初に，持ち家・借家など居住形態の実態に比例した割当を行った．江別市統計に見る野幌地区の居住形態別住宅は，持ち家66.4%，民間借家3.4%，公的住宅28.3%，給与住宅1.5%となっている．これに比例して1000サンプルを割り振れば，それぞれ643世帯，34世帯，283世帯，15世帯を抽出することになる．ただし，マンション形態での持ち家という区分がないため，便宜的に住宅地図にある戸建てを持ち家と読み替えた．それ以外の区分については，住宅地図巻末にあるアパート・マンション一覧表から民間借家・公的住宅・給与住宅を適宜判断して割り当てた．したがって，マンションも含めて持ち家層の意見が過剰に反映された可能性はあり，どのような方法が適切か，こんご模索が必要である．

2段階目の割り当ては，戸建てについては，町丁目ごとの世帯数に比例した形で被調査世帯を抽出するということである．具体的には，江別市が定義する野幌地区19町について，各町の世帯数が野幌地区全体に占める割合を求め，664票の割当を決めた．たとえば錦町の世帯数は野幌地区全体の5.2%を占めるので，錦町からは35世帯を抽出することになる．同様の方法で順次割り当てた結果は表1の通りである．なお，表1には同時に，実際に返却された票数と町別回収率を記載してあるが，これについては4節で言及する．

なお，野幌地区の外縁では，住宅地図に包含されていない住宅が多少あると思われるが（元野幌，西野幌，東野幌など），あくまでも住宅地図を台帳と考え，これらの住宅は無視した．同様に，住宅地図の巻末にある集合住宅一覧に掲載されていないアパート等もあるが，これらも無視した．したがって，住民基本台帳からするサンプリングなどと比較し

表1 町別世帯数・居住形態別世帯数から求める抽出数と回収率

	世帯数	割合	戸建抽出数	その他抽出数	返却数	回収率
野幌地区	16523		664	336	371	37.1%
錦町	860	5.2%	35	0	18	51.4%
幸町	664	4.0%	27	18	10	22.2%
野幌町	1408	8.5%	57	51	39	36.1%
東野幌本町	1862	11.3%	75	81	56	35.9%
野幌若葉町	2059	12.5%	83	49	49	37.1%
元野幌	466	2.8%	19	0	10	52.6%
野幌寿町	535	3.2%	22	0	9	40.9%
野幌屯田町	738	4.5%	30	0	12	40.0%
野幌美幸町	443	2.7%	18	0	10	55.6%
中央町	583	3.5%	24	0	12	50.0%
野幌松並町	667	4.0%	27	11	14	36.8%
野幌末広町	685	4.1%	28	23	10	19.6%
野幌住吉町	621	3.8%	25	10	14	40.0%
野幌代々木町	1187	7.2%	48	0	17	35.4%
東野幌	236	1.4%	10	0	2	20.0%
東野幌町	1038	6.3%	42	42	36	42.9%
野幌東町	918	5.6%	37	51	23	26.1%
西野幌	84	0.5%	4	0	1	25.0%
緑ヶ丘	789	4.8%	32	0	15	46.9%
あさひが丘	671	4.1%	27	0	9	33.3%

注: 世帯数などの数字は平成12年度。

て，転居を繰り返す層や学生など，地域とのつながりが薄い人々をサンプルから落としているというバイアスはあるだろう．また住宅地図は発行の2－3年前に現地調査を行っているため，現況との相違も多いが，この場合には台帳としての地図を優先し，新しい住宅が建っていたとしても無視した．したがって厳密に母集団を表現するなら「2001年住宅地図に掲載されている野幌地区の建物に現在居住している世帯」ということになる．

3.3 「番地」単位での多段抽出

3.2節で説明したような割当が決まったのち，具体的な世帯をどのように抽出するか．住宅地図からの抽出法として，必要なサンプル分だけ碁盤の目ができるように等間隔の線を地図上に引き，交点にあたる住宅を抜き出すという方法が考えられる．しかし試みてみると，正確な位置取りが難しいだけでなく，住宅以外の道路や空地にあたってしまう確率が高く，作業の厳密性も効率性も期待できなかった．そこで我々が考えたのは，その町にある番地の数と，番地の中にある枝番（いわゆる「号」）を数え上げて，その中から無作為抽出ないし等間隔抽出をしてゆくという方法である．しかしこちらも，枝番を網羅するのに膨大な労力を必要とした．ひょっとしたら行政の担当部署に，これら枝番を列挙したような文書が存在するのかも知れないが，われわれは手に入れることが出来なかった．

そこで試みたのが，層化多段抽出法を，一般的に用いられているよりもボトムのレベルで，すなわち番地のレベルで適用することだった．一般に多段抽出は，日本全体のような大きな母集団をとるとき，具体的に入るべき地区－市町村もしくは町丁目－を決定するために行われる．今回のように，町丁目レベルを出発点に，そこから入るべき番地を決定するというやり方は異例である．価値観が似た近隣の意識を過剰に拡大して抽出することになりかねないとか，近隣にアンケートの噂が広まるとか弊害も考えられたが，一方で投函すべき地点は集約されるため，労力が節約できるというメリットがある．

具体的には，どの番地を選ぶかをランダムに決定し，その番地の枝番を数え上げて，工場・倉庫や事務所はのぞく．当該番地に存在する戸建住宅数が割り当てを越えているなら，この番地の中から無作為抽出でサンプルを決める．当該番地に存在する住宅数が割り当てより少ないなら，また新しい番地を選定する．この作業を，割当て分を充足するまで繰り返し行った．現地で空き家を発見した場合には，番地のなかの別世帯を再抽出するか，それで間に合わないなら別の番地を再サンプリングした．一方，民間借家・公的住宅・給与住宅については，住宅地図巻末の一覧表を用いて等間隔抽出を行った．

以上のようなサンプリング方法はかなり独特のもので，批判があろうかと思う．とくに，同番地の全世帯に投函するやり方は，上述したように近隣関係によるバイアスなどが入り込む危険はある．しかし今後，個人情報保護との関係で有権者名簿の閲覧等はますます困難になる．電話法・インターネットサーベイでなく戸別訪問にこだわるのならば，今回の方法を頭から否定するよりは，この結果がどの程度のバイアスを持つのかを意識し検証する方が建設的と考える．住宅地図を利用しながらより精度の高いサンプリングを行うことは可能かどうか，各位のご意見を伺えれば幸いである．

以上のような意図と方法のもとに得られた調査結果を，4節において報告する．

4．調査結果の概観

3節までの議論を踏まえて，実際に調査票を配布したのちの回収率の傾向と，それを集計して現時点までに判明した知見の概要について簡単に説明しておきたい．詳細な分析は時間がかかるため別の機会を設けたい．ま

た，なお返送されてくる調査票があるので，これは最終確定結果ではないことに注意されたい．

4.1 回収率の傾向

調査票を配布し終わったとき，筆者は調査屋としての経験から，2割から3割の回収率を予想していた．ところが表2のように，調査票返送の出足がよく，1月25日に締め切った暫定回収率は37.1%であった[6]．このような高回収率が得られた原因としては，① 身近な地域に関する調査であったこと，② 野幌商店街という身近な住民主体が実施し，かつ江別市や地元大学などの協力・支援も明記されていたこと，③ 同封された新聞記事が正統性を高め，アンケートへの信頼度が高まったこと，等の要因は挙げられる．また，野幌地区において再開発等の動きが平成11年度から存在していたことがそれなりに浸透しており，潜在的な意識の高さを作っていたということかも知れない．しかし，こうした学問的説明とは別に，住民の期待と悩みが調査票という形をとって返送されてきたように私には思われた．地区別に見ると，3節の表1に見えるように，美幸町・中央町・錦町など駅北地区の回収率が高いが，駅から離れた元野幌・緑ヶ丘などでも回収率が高く，意外な場所にまちづくりの潜在的エネルギーが眠っているかも知れないことが分かった．

表2 返送された票数

1/15	16	17	18	19	21	22	23	24	25	26
88	68	60	32	26	32	15	18	13	12	7

4.2 主要な知見

こうして回収された調査票の回答をコンピュータに入力し，単純集計した結果の一部を資料3にまとめた．この結果をみると，2節の最後に提示した仮説のうち②は実証され，①③についてはやや仮説と異なる知見が得られたといえそうである．以下，資料3を参照しながら結果を確認して頂きたい．

まず，高齢者施設の立地については，老人ホーム・短期入所施設・老人病院・介護センターのいずれについても，「静かな郊外」（合計397回答）への立地よりも「町なか」（合計706回答）を求める声が多かった（問5）．とりわけ介護センターについては，「町なか」への立地希望が211回答（回答者の59.9%が選択）であるのに対し，「郊外」への立地希望は80回答（回答者の22.7%が選択）に過ぎない．これは我々の仮説②を裏付ける結果であり，「高齢者施設は郊外に」という固定観念は，そろそろ破られる必要がある．回答者の平均年齢が56.1歳（調査票のF1項目）と高齢であり，身近な問題として考えざるを得ないテーマであることから推せば，この数字は気まぐれ回答の集積ではないだろう．

一方，まちづくり活動の浸透度合いについては，嬉しい誤算がいくつかあった．まず，駅北の限られた地区でしか知られていない（仮説③）と考えてきた我々の活動が，かなり広い地区で興味を持って受け止められていることは表1で確認した通りである．さらに，ギャラリーNoppoの認知度も予想外に高かった．通勤・外出・買物で商店街を通過する人は全体の46.9%だったが（問2の選択肢1から3の合計192件），そのうち7割の人には知られていることが分かった（問2付問の選択肢1から3の合計131件）．また，自由解答欄への書き込みがあった票も全体の10.2%（38票）に達し，切手を添付した激励などもあって，我々は大変勇気づけられた．

今回の調査の中心である食事ニーズについてはどうだったろうか（問4）．食事にともなう心配ごととしては，「火を使うことなどで危険がある」ことに心配が「ある」と言い切った人が39.8%にのぼったことが目をひく．それ以外の3項目（他人と食事する機会

資料３：集計結果

問1　野幌のイメージ

	度数	対回答者比
静かな街	206	55.8%
交流が盛ん	37	10.0%
緑が多い	141	38.2%
安全な町	68	18.4%
高齢化	232	62.9%
不用心	119	32.2%
つながり薄い	125	33.9%
環境悪い	22	6.0%
その他	18	4.9%
	762	262.3%

問2付問　Noppo認知度

	度数	対回答者比
知っている	55	14.8%
通りがかった	42	11.3%
名前を聞いた	34	9.2%
知らなかった	239	64.4%
無回答	1	0.3%
	371	100.0%

問5　施設の立地希望

	度数	対回答者比
郊外特養	131	37.2%
まちなか特養	148	42.0%
郊外デイケア	102	29.0%
まちなかデイケア	164	46.6%
郊外病院	84	23.9%
まちなか病院	183	52.0%
郊外センター	80	22.7%
まちなかセンター	211	59.9%
その他	8	2.3%
合計	1111	315.6%

問4付問　配食に求めるもの

	度数	対回答者比
値段が安い	37	72.4%
必要なとき配達	141	63.6%
バリエーション	68	44.4%
気配り	232	28.5%
人間的やりとり	119	46.4%
好きなもの	125	6.3%
一人では料理できないもの	22	29.7%
合計	744	291.2%

問2　商店街へのなじみ

	車	徒歩	両方	合計	
	度数	度数	度数	度数	対回答者比
通勤経路	8	13	4	25	6.7%
外出経路	43	45	9	97	26.1%
商店に立ち寄る	25	40	5	70	18.9%
たまに通過	74	34	8	116	31.3%
合計	150	132	26	308	83.0%

問3　夕食の形態（週あたり回数）

	平均	平均	平均
	自分	子供	両親
自宅で調理	5.93	2.09	1.82
総菜、テイクアウト	0.63	0.24	0.16
レストランなど	0.4	0.17	0.08
その他	0.09	0.03	0.02

問4(1)　他人と食事する機会が減るという心配

	度数	
ある	114	30.7%
多少ある	136	36.7%
ほとんどない	60	16.2%
ない	40	10.8%
無回答	21	5.7%
合計	371	100.0%

問4(2)　外出できず食材が揃わない心配

	度数	
ある	97	26.1%
多少ある	155	41.8%
ほとんどない	56	15.1%
ない	42	11.3%
無回答	21	5.7%
合計	371	100.0%

問4(3)　料理するときの危険が大きいという心配

	度数	
ある	139	37.5%
多少ある	117	31.5%
ほとんどない	53	14.3%
ない	40	10.8%
無回答	22	5.9%
合計	371	100.0%

問4(4)　配食サービスが不足しているという心配

	度数	
ある	73	19.7%
多少ある	137	36.9%
ほとんどない	62	16.7%
ない	32	8.6%
無回答	67	18.0%
合計	371	100.0%

F1 年齢

	度数	
10代	1	0.3%
20代	8	2.2%
30代	38	10.2%
40代	73	19.7%
50代	83	22.4%
60代	98	26.4%
70代	54	14.6%
それ以上	11	3.0%
無回答	5	1.3%
合計	371	100.0%

F3 居住年数

	度数	
10年以下	147	39.9%
10-20年	77	20.8%
20-30年	75	20.2%
それ以上	69	18.6%
無回答	3	0.8%
合計	371	100.0%

F4 同居人数

	度数	
一人暮らし	42	11.3%
2人	127	34.2%
3人	74	19.9%
4人	71	19.1%
5-6人	43	11.6%
それ以上	4	1.1%
無回答	10	2.7%
合計	371	100.0%

F1 性別

	度数	
男	105	28.3%
女	258	69.5%
無回答	8	2.2%
合計	371	100.0%

F5 居住形態

	度数	
戸建持ち家	260	70.1%
マンション持ち家	65	17.5%
賃貸マンション	19	5.1%
公営住宅	6	1.6%
社宅・寮	6	1.3%
その他	5	0.8%
無回答	10	2.7%
合計	371	100.0%

F6 老親の居住形態

	度数	対回答者比
いない	68	23.1%
この家で同居	38	12.9%
別の家で同居	46	15.6%
老夫婦のみ	89	30.3%
一人暮らし	56	19.0%
施設入所	12	4.1%
病院入院	14	4.8%
その他・無回答	48	12.9%
合計	371	122.7%

が減る心配，満足な食材を揃えられない心配，配食サービスが不足している心配）についても，「ある」「多少ある」をあわせた数字はそれぞれ 71.4%，72.0%，67.7%と高率である．高齢社会にあわせたきめ細かな食事関連プランが求められていることが分かる．

一方，配食サービスが不足していると答えた人には，求める食事のポイントを 3 つまで挙げてもらった（問 4 付問）．これに対して，「値段が安い」「必要なときいつでも配達してくれる」というコンビニ指向が 1 位，2 位を（回答者の 72.4%，63.6%が選択）占めたことは，本稿 2 節で立てた仮説①を裏切る結果であった．高齢者配食サービスも，基本的に従来の外食産業と同じ路線で受け止められているということである．しかし一方，「バリエーションがある」「人間的やりとりがある」という回答を選択した人もそれぞれ 44.4%，46.4%にのぼっている．じっさいに配食サービスが定着していけば，後者のような回答が増えていくかも知れないし，切実に配食を必要としている層だけを取り出せば，回答の傾向は変わるかも知れない．だから最終結論は保留しておきたいが，高齢化が進みつつある実態に不安を感じつつも，その生活イメージをつかみかねているというのが，野幌住民の現状ではないだろうか[7]．

5．まとめにかえて

こうして，本調査で得られた知見からは，この地区の意外な可能性とともに，高齢化に戸惑う住民の姿と潜在的ニーズが浮き彫りに

なったといえる．住民の回答が唯一はっきりしているのは高齢化施設の立地についてである．誘導を排した質問文のもとでもなお，介護施設等を郊外ではなく，まちなかに立地して欲しいという回答が圧倒的だったことは重い結果ではないだろうか．

本稿は，調査終了直後にとりいそぎ単純集計をまとめたという性格のものである．この基礎調査をさらに詳細に分析して，その含意について引き続き何らかの形で報告したい．さらに，今回見えてきたまちづくりの住民エネルギーを有効に水路づけしてゆけるよう，多次元的な調査を企画していきたいと考えている．たとえば，2002年後期に札幌学院大学社会情報学部で担当する社会調査実習において，高齢者に対する生活史の聞き取り調査を行い，この地区の歴史を再構成することにより，「野幌で暮らすこと」の意味を重層化させてみたいと構想している．

これまでの経緯と調査の意義を理解していただき，引き続き関係する皆様のご協力を頂ければ幸いである．

（謝辞） 調査にたいし好意的にご協力いただいた野幌地区住民の方々に感謝する．一方，忍耐の必要なサンプリングを中心的に担ってくれた森田誠・巻口人史君，ボランティアで入力作業を担ってくれた岡本頼和・林勇治郎君にもお礼を申し上げたい．なお，本調査に係る経費は，経済産業省の外郭団体である中小企業中央会の助成から支出された．

注

1　正式名は「福祉コミュニティ施設の建設・運営を核としたまちづくりミシュラン研究会」となっている。

2　（矢作、1997）にも取り上げられている。

3　NPO法人「やきもの21エッジフィールド」のWeb page
http://www.yakimono21.org/pr/e-field.htm
による。

4　参考文献にある「野幌駅周辺地区まちづくり提言報告書」「市民とともに育つまち〝のっぽろ〟」である。

5　なお、これ以前に江別市中心市街地活性化基本計画策定委員会では「市民消費動向意向調査」（文献表参照）を実施しているが、これは商店街の需要調査に特化したものであり、われわれの知りたい情報はほとんど含まれていない。

6　その後、2月15日までにさらに30通の返送があり、回収率は40.1%となっている。しかし締め切りの都合上、本稿は371サンプル分の分析を行っており、その後に返送されてきた分は含めていない。

7　なお、調査結果はWebでも随時発表していく予定である
(http://www.nopporosyoutengai.com/)。

文献

江別市（1995）『後期都市基本計画・えべつ21「15万人都市プラン」』

江別市中心市街地活性化基本計画策定委員会（2000）『市民消費動向意識調査』

街なか整備協議会（2000）『野幌駅周辺地区まちづくり提言報告書』

街なか整備協議会都市環境部会（2000）『市民とともに育つまち〝のっぽろ〟―都市環境部会からの提言―』

老人給食協力会ふきのとう編（1989）『老人と生きる食事づくり』晶文社

清水洋行（2000）「現段階における食事サービス活動の組織化と課題―日本の4つの先駆的団体を事例に―」老人給食協力会ふきのとう編『ようこそ！　食事サービスの世界へ－生活の質の向上をめざす食事サービスと住民参加－』社会福祉・医療事業団（長寿社会福祉基金）平成11年度助成事業報告書

矢作弘(1997)『まちはよみがえるか』岩波書店